慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴォルフ民族文化史(間崎万里譯, 刀江書院發行)
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.2 (1934. 8) ,p.162(340)- 163(341)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340800-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランスは戰爭年數四六〇年の間に十四箇國に對し八五戰爭
イギリスは戰爭年數二三三年の間に十二箇國に對し四九戰爭
ロシヤは戰爭年數一三五年の間に十一箇國に對し三六戰爭
ドイツは戰爭年數六三年の間に八箇國に對し二戰爭
を行つてゐると。（田中荆三）

ヴォルフ民族文化史（間崎万里譯　刀江書院發行）

凡そ世界史上の興亡を論ずるものは、その第一歩に於て自己の立場を鮮明にするの要がある。これ世界史の使命が少くともその一面に於て啓蒙的なるものを含む故である。世界史を描くものが徒らな公平無私を拒け、時には科學的立場を棄て去つてまでも是非善惡、正邪曲直を論ぜんとするが如きは實に此處に由來するものである。彼は最早や歴史家にあらず、史論家である。それ故、史論家の責務は先づ鮮明な豐富な確乎たる自己の立場を築き、次でその立場から利用し得らるる史料を縱横に驅使して論旨の貫徹を圖るべきである。其處に長所も生まれれば、短所もまた自らこれに伴ふであらう。見方によつてはその長所の大きい程、その短所が甚しいかもしれない。これに接するもの、同ずるものは贊意を表し、難ずるものは否定を重ぬるであらう。人、各々の立場である。

今春、間崎教授が譯出されたヴォルフの民族文化史は斯うした世界史の特徴を最もよく具現せる書物である。「ドイツの國士にして勇敢なる鬪士トライチュケとハッセ」の傳統を汲む國粹論者の

史學

七月三日午後　ドイツの對露最後通牒。總動員令の撤回要求。
イスヴォルスキー（ロシヤ）はロンドンとパリーに於て之を知れるにも拘らず、オーストラリヤ讓歩の報道を否認す。
七月三日夕刻　フランスの社會黨首領ジョーレス（平和論者）パリーに於て殺害さる。
七月三日夜　フランスは戰爭を決意す。
七月三日　ドイツよりフランスの態度に對する質問。
八月一日　フランスよりの不滿足なる同答。
八月一日一五時四五分　フランスの動員令下る。
八月一日一七時　ドイツの動員令下る。
八月一日夕刻　西部及び東部に於ける敵對行動開始。
八月一日夕刻　ドイツのロシヤへの宣戰布告。
八月二日　アルトミュンステロル（上アルザス）に於けるフランス人の國境侵入。
八月二日　イギリス艦隊の動員。
八月二日　ドイツ軍のベルギー通過承諾の懇願。拒絶。
八月三日　ドイツ軍隊のベルギー侵入。
八月三日　ドイツのフランスへの宣戰布告。
八月四日　ベルギーの中立を『侵犯』せるためイギリスのドイツに對する最後通牒。
八月四日　イギリスのドイツへの宣戰布告。

ドイツは事實平和を脅かしたであらうか？

三十年戰爭（一六一八）の初勃發以來一九〇五年迄に、

著者はナチスの出現を髣髴せしめる此書によつて所謂「民族を離れて文化なし」とするドイツ系思想を極めて大膽に發表してゐる。「最良の公民教育は根本的によく歴史を理解せしむるにある」と主張するヴォルフは、凡ゆる歴史の成生に對して最もドイツ的な理解を要求するのである。人類史の全過程を舊文化世界と新文化世界の二期に分ち、ギリシヤ・ローマ以前を前者に包括し、中世及び近世を後者に於て說く。先づ各章節の冒頭に特色ある歴史年表を掲げて重要事項を說明し、直に論說に入る。彼一流の解釋に基いて採るべきを採り、捨つべきを捨ててゐる。何等の遠慮も無い。ヴォルフの立場そのものには同意し兼ねるものがあるが、然もそれは實に堂々たる立場である。

兎もあれ、一途、史實に對する正確な認識を標榜して反つて徒らな詮索と機械的な記憶に墮し、歴史に自由な批判檢討を加ふべき知見を啓發するの一面を忘却した我國歴史教育界にとつて、本書は少くとも一つの快適な清凉劑たるをまぬがれぬことであらう（近山金次）。

長久保赤水（杉田雨人著　水戸・川又書店發賣）

明治三十年の頃矢津昌永氏の地學小品と云ふ著に伊能忠敬を我國地理學の鼻祖となせるを見、本書の著者杉田氏は直ちに之を難じ、長久保赤水をなほ一段の先驅者なりと書狀をもつて抗議した。矢津氏之に答へて赤水に關する資料の提出を請ふたので著者は爾來赤水先生傳の研究に沒頭し、繁忙な實務に鞅掌せられる間寸暇を惜んで乏しき文獻を蒐集し、之を整理してとりあへず發表されたのが本書である。四六版二百八十二頁、圖版十葉の小册子、量としては大なりと稱することは出來ないが著者が身親しく赤水の生地を尋ね、またその活躍せし地方にあり、書簡、著書、碑文、その他の所謂第一等資料を利用し、檢討に檢討を重ねて著はしたその內容の豐富さ新鮮さは他に類を見難き近來の好著述である。

赤水は赤濱の一農家に生れ、學を好み、拮据精勵廣く智識を求め、水藩の學風として宋學偏重の弊ありしも、之に拘束されず、古學にも同情を持ち攷々として究理につとめ、地理天文の學に力を盡し、殊に晩年地理志の完成に沒頭したその一生は篤實なる水藩の氣風を遺憾なく代表してをる。遂に認められて鄕士格に取立てられ、後擢んでられて文公治保卿の侍講となつた。著者は赤水の一生を語るに委さにその周圍の多數の師友の事蹟を詳述し、たゞに一赤水の傳記のみならず水藩否本邦儒學史の一斷面を表はしてをると云つてよい。たとへば赤水が古學の徒と認められ壓迫が加へられんとした時、赤水は物必ず長短あり、苟くも其長を取れば何の書か讀むべからざらんなどと陳辯これ勉め、事は幸ひに穩便に濟んだ。これが後寛政の異學の禁制に水藩の沈默を守りし理由を說明すると云ふのが著者の意見である。また赤水と高山彥九郎との交誼厚かりし事などは、水戸に如何にして尊王攘夷の思想が中興したかと云ふ事情を推究する場合逸すべからざる重要な事蹟である。著者は此等の興味ある問題をよく擧示し、赤水が寧ろ裏面にあつて捨石として活躍し、水藩の潛める一大勢力であつたことを明かにしてをる。